

1986
No. 70

事務局：長崎市

津田尚美方(〒. tel

編集人：葛西よう子：長崎市

売り切れまじ

7
セのイト 3
4
, '86
L

九月一日、事務司の玄園にドーンと「み上
げられた。印刷所からとんだばけの女のノ
ート。三年の山を見た時、果して「紙の
全部売れるのだろうか。かえ、使を下さる女性
達が、このだろうか」と私達は心細い目をして
交し合います。

三年前の完結した日の事を思い出し、すむに
とどいてる甲斐書、何通かに目をやり、はげま
し合ふ。マスコミまわりの精を出し、まだ著
けた日々がありました。取上げてもうるは新聞
の記事によるのが合ひ、一ヶ月たっても取上げてもう
えな。新聞社へはもう一度と定をはげましな
ばう行きました。あつひのふる本屋さんとす
べし、友人の間とかけあつても十冊単位であつて
もらひ、数人に逢う度にすすめる様に、ソフメイと
持参しては、バツグのいふが切れたりし、事務初
めへやると来る申込書の数に一喜一憂しつゝ

秋は深まるをうきまゐした。そのノートの山もたんだ。

んに似たり。増刷すべきかどうか。みんな頭を
 かかまじした。増刷は五百部単位でしか出来ま
 せん。資金の準備もたいやう数の主婦の集まりであ
 る。私達は増刷分を売れずしてより抱え込むの事と
 想像して心臓がちぢむ様な思ひをしうつ。どうなりま
 した。と年が明ける前に読む事は社会的責任の
 上からどうとも出来ないの考へ方で、おそろおそろ増
 刷を決定したのです。十二月中旬、事務司の床の上には
 四百冊をさるノットが残り、何と赤字を出さずにす
 みそうだと喜ぶが合います。そして十二月、二十日す
 ぎ「婦人公論」一月号（六十一年）と朝日新聞の
 全国版に紹介記事が出たりです。年末、年指の休
 日をひかえてこの時、急ぎの増刷は出来ません。私達
 は考えを束、もう三で打ち切る事にしたのです。
 年内に全国から来た本は注文にはあがらずある
 ノットを回収して何とか応じる事が出来ました。た
 し、一月になつてから中津文を来た本々には
 残念で仕方がないのです。御ことやりする事となり

Books

今、私達とときめかせ、勇気づけてくれる
『本達』をさがしはじめます。 Books

三年前「セウイト」でえたさうやかな利益と女性の
ために還元しようと私達は長崎市中、中央公民館の図
書室に「ばそんうーまん天庫」を贈りました。一昨年の
ひな祭りの日でした。今回も、もしさうやかな利益があ
れば(現在集計中です。今はおそう?)「ばそんうーま
ん天庫」を更に充実させる為に使いたいです。

どうか読者の皆さん、二んを本のみない、読んでこそ良か
ら。みんなにも読んでほしい。この本を知らせて下さい。

先日、某新聞に出た、吉田ハナ子さん(フォトジャーナリス
ト)の発言が心に残りました。

「この七月、たまたま開かれた『国連婦人の十年の国際会議』と
「フォーラム」を取材したとき、私のその写真家は、ストレート
な、おもしろく、なると新聞の編集者に言われた。世界の婦
人のあり様を真実に話し合おうとするのは、ストレートだと
そうをなく、女同士がけんかしているとか、せめてより力な未来の
ホテルがなくて、トラウマをひきずる、こうこうといる国とい

そんな写真ばかりマスコミはさがしています。……そうゆう斜に
かまえたマスコミの商業主義傾向、目に余ります。ここに写真
はもうけ主義に利用されていきます。……又、国民が知るべき
本に大切な情報と、どこにも、スキャンダルですりかえるよう
役割を果してものかも知れません。日本はもと、謙虚に、サ
世界に目を向くべきだと思えます。アフリカの飢饉にとも、マ
は下腹が空いた子供、の写真を求める、ある傾向、飢饉がサ
もうける、様々風潮を感じます。……これは若い人達と
女性達に期待したいです。アフリカやニカラガの人は胸をは
ります。『女性の貧乏と戦争』、それは太古の昔も、まもあうな
い。……私、現代を生きる、フォトジャーナリストとして、人間が胸
を張るべき美しさ、あるべき人間の尊厳、誇りを
お解し、たいあげたいと思っております。

この吉田ハナ子さんが、ニューヨークで過した日々の事を書いた
本が「自分と、旅に生きています」(講談社文庫)
です。オヘアに「今日をせい、い、生きてあるあなたへ」と書か
れています。『日本の女性は、気持ちはやさしいけど、女として、特
に人間として、さ、び、と言われる言葉を認めよう、と、え、い、
自分と、男に、つ、くる、事、が、ま、ま、あ、た、日本、女性、……』
これは、この本の「序」です。